

「取り残さない」避難の実現へ
機会をつくり、「だれひとり
気候変動や防災について学ぶ



取材先

一般社団法人
レベルフリー
代表理事
気象予報士
防災士
坂本 京子

災害時の避難についての相談を受けて、
地域に寄り添う活動を開始

— レベルフリーの活動内容と、設立の経緯について教えてください。

山口県内で小さな団体を作り、気象予報士としてお天気のイベントや防災活動を始めました。アレルギーのある子どもの保護者の方から避難の相談を受け、アレルギーを考えた炊き出しや避難所のあり方を考える取り組みを開始しました。

その後、発達障害のある子どもの保護者の方から避難所を利用する際に、他の方に迷惑をかけるのではといった悩みを聞き、避難所での車中泊について学ぶ中で、地域に寄り添う活動をしたいと思い、一般社団法人を立ち上げました。

— 坂本さん自身、気象予報士、そして防災士でもありますが、資格を取得しようと思ったきっかけはなんですか？

結婚して兵庫県尼崎市に移り住んで約2か月後、阪神淡路大震災で被災しました。当時20代後半で、引っ越したばかりの土地で頼れる友達もほとんどおらず、怖くて毎日泣いていました。

阪神淡路大震災は「ボランティア元年」と呼ばれ、災害時のボランティア支援や自主防災組織の結成が進むきっかけとなった災害です。

ボランティアへの感謝と気象への興味から気象予報士の資格取得を決意し、ボランティア活動にも興味を持ちました。

正しい知識を身につけ、
自助・共助の関係を築くことも大切

— 先日（2024年11月24日）には、レベルフリー主催で「ペット避難を考える」の第2回目のイベントも開催されました。災害時のペット避難について考えることも、大きな備えです。

はい。ペットがいるからと避難をためらうことがあってはいけません。

国は、ペットを連れて避難所に行く「同行避難」を推進していますが、やはり避難所では臭いや鳴き声の問題、他の避難者の動物アレルギーの懸念から、受け入れの体制が地域によってはなかなか進んでいないのが現状です。

過去の災害では、避難後にペットを迎えに戻って亡くなった事例もあります。ペットがいるから「避難しない」という方が増えないように、まずは飼育者自身が学ぶべきこともあります。

そこで具体的な研修を通じて大切なペットを守るための学びの場になればと思って企画しました。自治体の担当者など様々な人が見学に来てくださったので、将来的な仕組みづくりにつながることを期待しています。



▲第2回「ペット避難を考える」



第2回「ペット避難を考える」にて、車中泊のポイントをレクチャーしました。

— 参加者の数も多く、関心の高さが伺えました。車中泊避難は、選択肢のひとつとしてとても有効ですね。

車中泊避難は主に避難所の駐車場での利用を想定しています。ペット同伴だけでなく、乳幼児のいる家族や集団生活が困難な方にとっても有効な選択肢です。車の快適性向上も相まって、安心材料の一つとなっています。

ただし、リスクもあるため、事前に学習し、適切に活用することが重要です。

— 他には、どのようなイベントや普及啓発活動をされていますか？

主に二つの活動を行っています。一つは「気象や気候変動を考える」活動です。2023年には「わくわく防災体験ツアー」を開催し、雨の重さを体感したり気象観測機器を使ってみたりと、楽しみながら学べる体験型のイベントを実施しました。

また、山口大学と連携し、ドーム型VRを使い平常時と豪雨時の河川の映像を比べたり、過去の災害写真をカラー化して展示するなど、研究成果を活用する



▲「わくわく防災体験ツアー」

ことで様々な角度から気象や気候変動を見ていきました。

もう一つは「やさしい避難所を考える」という活動です。年々、災害が甚大化、広域化する中で、多様な人々が安心して避難できるよう、SDGsの理念である「だれひとり取り残さない」ための仕組みづくりを目指しています。2024年には市内のスーパーの協力で、お惣菜を作っている技能実習生のベトナム人約20名と居住地の自治会をつないで、相互理解を深める防災研修会を3回実施しました。



▲ベトナムの技能実習生との交流

26名の子ども防災士が誕生▶

— 技能実習生たちと接して、地域の方々はどのような反応でしたか？

最初は不安そうでしたが、一緒に日本の伝統的な遊びを楽しみ、ベトナムの暮らしや言葉を教わったりするうちに、すぐに打ち解けていきました。ベトナム語で挨拶したり暮らしを心配したりと、地域が彼女達を受け入れていく姿を見て、「顔を知っている、名前を知っている、話をしたことがある」というのが、地域防災の第一歩だと実感しました。

その後も地域では夏祭りに技能実習生を招待し、浴衣の着付けや盆踊りを楽しむなど、交流が続いています。自治会長は「お互いに助け合うのは日本人であろうと外国人であろうと関係ない」と話され、地域の一員として根付いていけると感じました。

この活動を通じて、避難所内の多様な人々に対し、互いにやさしく接することができれば、災害時だけでなく、社会全体もよりやさしくなっていくと考えています。そのような思いを込めて、活動を続けています。

気候変動や防災を学び行動できる子どもたちを育てたい

— 気候変動影響というと、災害だけでなく、夏の暑さも厳しくなっています。気象予報士、防災士として、現在の気候変動影響についてどのように捉えていますか？

2024年の夏は地球からの最終警告だと感じました。記録的な高温が続き、山口市では猛暑日が前年の3倍に達しました。一方、各地で豪雨にも見舞われ、異常気象が顕著でした。夏の期間の長期化も感じられ、緩和策と共に適応策も必要です。

気候はその土地を取り巻く風土であり、そこで文化や産業が生まれて生活が営まれていきます。その土台である気候が変わろうとしているのです。気候変動に危機感を持ち、自分事として行動することが必要です。変化した気候は元に戻らない可能性があるため、今すぐアクションを起こすべき瀬戸際にあると考えています。

— 今後、レベルフリーが目指すところはありますか？

2025年度は「気候変動」をテーマに、児童生徒を対象としたフィールドワークを通じて、未来の地球環境を考えアクションにつなげる機会を作りたいと思っています。竹を使った住民参加の演奏会も企画中です。

また、「子ども防災士」の育成にも関わっていて、若い世代の防災リーダーを応援していきたいです。

